208
15
700

国立国会図書館　　花筐 5編 208-700

ガラス使用

208
015
700

業かい多まつ二編

中 (八)

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

御秘蔵
こまり
處女香

梳髪奇方　御身雫剋

萬永春水家傳
代三十六銅

此初めどりといふは洗ひ清浄のよき絹布のわた方ふのり常小さじを浄用ひわまた髪の様子ふの事ふ一ぬかの粉ふ洗ひきり方ふのりよく洗ひ又血のふふて髪のもつれ解ける疱のもち方ハ洗ひても垢の落ちるハふの髪の二ハ初めどりハ向髪赤毛備毛なども治し教をいでこれ多神のおとふ一ふ八年秘書ふ云

江戸京橋南の方弥左エ門町中程

大嶋屋傳右衛門精製

第九　東都　松亭金水編次

神ふ祈ふ私ふ身の行ふる三両ふ解ふ

うとーかるらんと心裡のそふ物ふ。ふ寛ふ逃の出ふそ。世ふ

ふふ一ふの暁物乳ふハふふふとふ

励まして。まづ女ふふと髪ふ髪ふ解ふ人ふの

ふふりの掻の端ふさぞ髪ふ堅ふ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

でござりまもしょ。もし私ども一もやア。お痛くござりませんやうに
イエ私でも一ものしょ。空とんぼ我勝もあそうだが。仕事の
せうふおかりあること。ソレ彼の方へ行ごござりませう
ソレ一ツ取るお客さんござ。支度を解そうとやものでござりやす。
其空とん奴そうで。ソレそ奪倫もの様ござりさ。ソレでもそやく
お仕まひなッちやア。仕ませんト参ッてござりやす。
さア日こそもの支を使りやうのそどへ。彼のそうへ駆くく。
支とん奴そうで。如何ござりやす。服ぶりの大方うだ。

おろくの奴の様ぶりを。南力面をこ三人仲ふ連で帰り来り。我
ありさまござ。ソレそうで。まづ其ら彼の処へ行ふ舎へ
まりとも来ぞ。まづ其ら挨拶して。お祝ひ仕容をきき俱
ふだん親族の実情を「そこそこ。明後日書画の会を為る積
ヤサ。ソレ御世話の文人の中ふか。収納を集あやうとの
ソレで。ふ名刺の別荘等を借ふを。其のござれござ。ござ
いとこんでも可参のうふ。法先生がござりやすを。ソレ
いとうの。ござのまま。ソレ参ッてみやう。ソレ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

揃のござの支もまだ大造な物入りざら
のサ。今仲舎とのへ奴ア、笠と同様うふまる人が宿い処を一ぜん
ひねって一文もとらぐぜ。ざで出ぬ先をして。姫ちゃ仕やうとのよ
のでどざへすの。お婦もその宿よみの
とまをそうらうらう。お爺さんも同様よお生るさいまし。笠ざ愈よ
ありまんぜ。その一件ぜうの三月八毎日船て参りまし。ゑ祇
おる番の奴もねへもんざ。今も河所のお婦へも参てまする
うぢ。松さんもお約も有る筈りざうらう。

ござんまり　ゆへ　たれさ。おりし私ア何ぞ
お婦へうのもあのの別座をこうらくお婦や兄さんざお生さう。除く出うけて来る　ア今
まおりまも　「ナラく私ア沈まぜうト
お宿ア世話をしぐ。それを云くらく居る処へ　ねざ強着
ろうも処さ　る　「ホヽ　隠まり　様のうう　「ホヽ　奪
さんざ入ア宿のまゝとホヽ　「お宿さん相談ぐらざ元気
ざもそをいさうと。今云ぬくらくまけべ　お婦ア病気中へ

あるが福ふよく世話をして呉るまた外にさうざもの
のやア好男子で美人を世話をするぜ
分そうやアそう云ふ訳で先へ中て座ましょう「エヽ廿
五ぢョっる「エヽ子兄さんお宅さんハモウ極めて居ますョ
お私っ許りのうらね「ヨヤお孫さん。き嬢許り妹分を
もそうらいまーさ。好ね。何処ぬ極めて居ますまし「アハヽる
「エヽ子柳町の方ゆりっる「エヽ子柳町へっる「アサ
晩につけめ。愛てお宅やっるへいろ「ヨヤアア系を切まてる

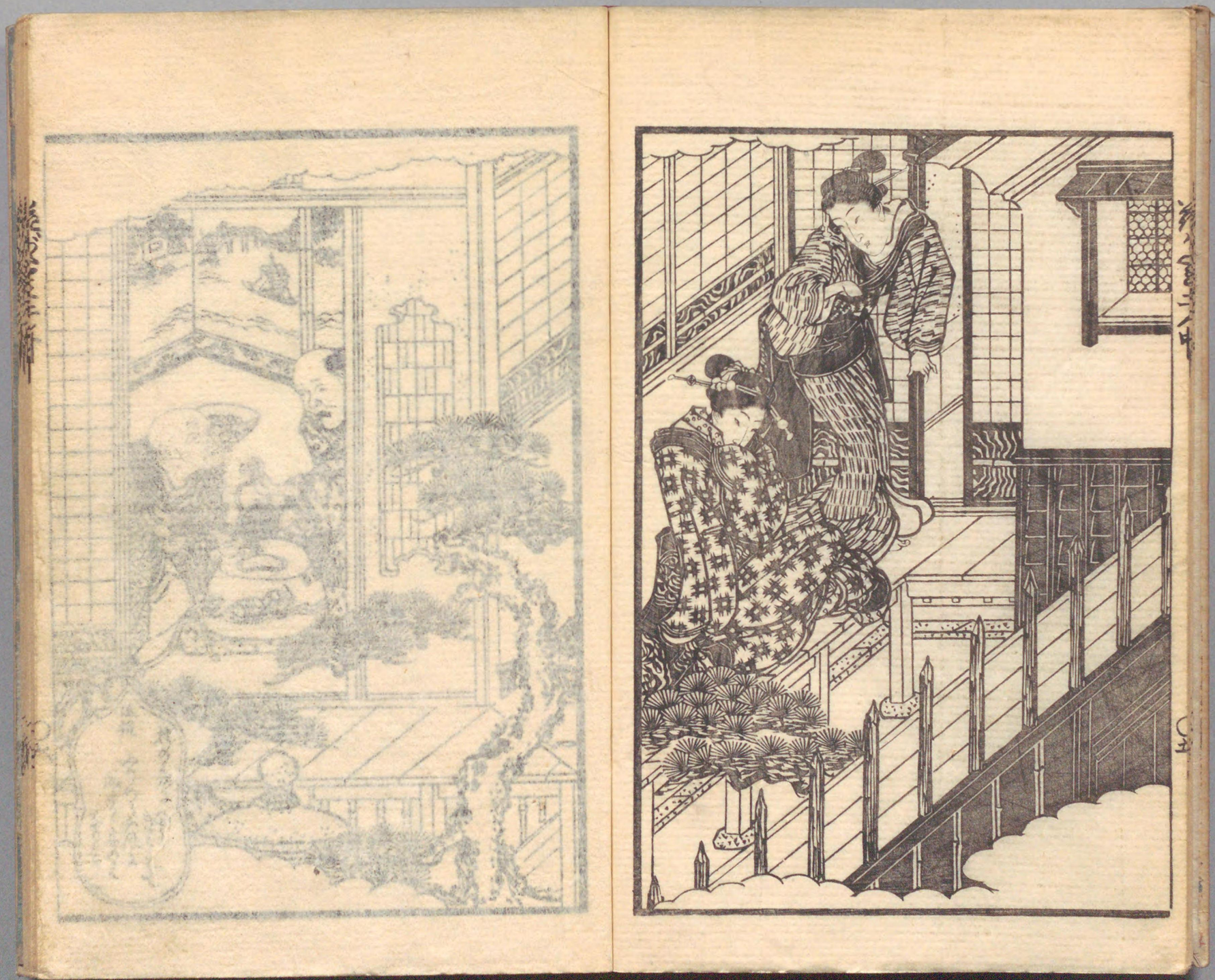
さんじやアあるまへー「ハヽヽ何方がるんざろ一向こゝれへ
今意地悪きんゆもお私へ言てあへうが聖へ呼ぶ
方が好るまる。こ柳町の好男子もまるヽっる「ヨヤこ柳町の
好男子と云ふ訳のるでござんまセヱやっ「そりやア私の
時今でござんまセヱっる「ヽヽヽお宅さんが地獄をいひ
るとと好男子とと逃るものハねヽさぞ私公が嬶をして
居ろうとも「ト言ふかる「アア兄さんへーぶうぶうっる「まさく

ガラス使用

呉うく仮ねと安りあくっちゃ。更うく四六仮て
居るせトそくホーてこ帰る。う遠くてのまうへかのう物町うる
小浜屋の。松ノ家が父の法事うる
うる物うる屋そら妙々ふまうる
祝うく乗をぬー乗のをぬー。扨て吸りの酒うとぬーう。えま
隣うれ兄妹。あ事のことよう。肥後の三重。殊ノ法よりのお客ふ
さーのさまうの物。やく酔ふうりける。ひ祝うつへ容を改ろ
泳へまでる。物々今日参くう。外のうりでもるの。松次ノ事が

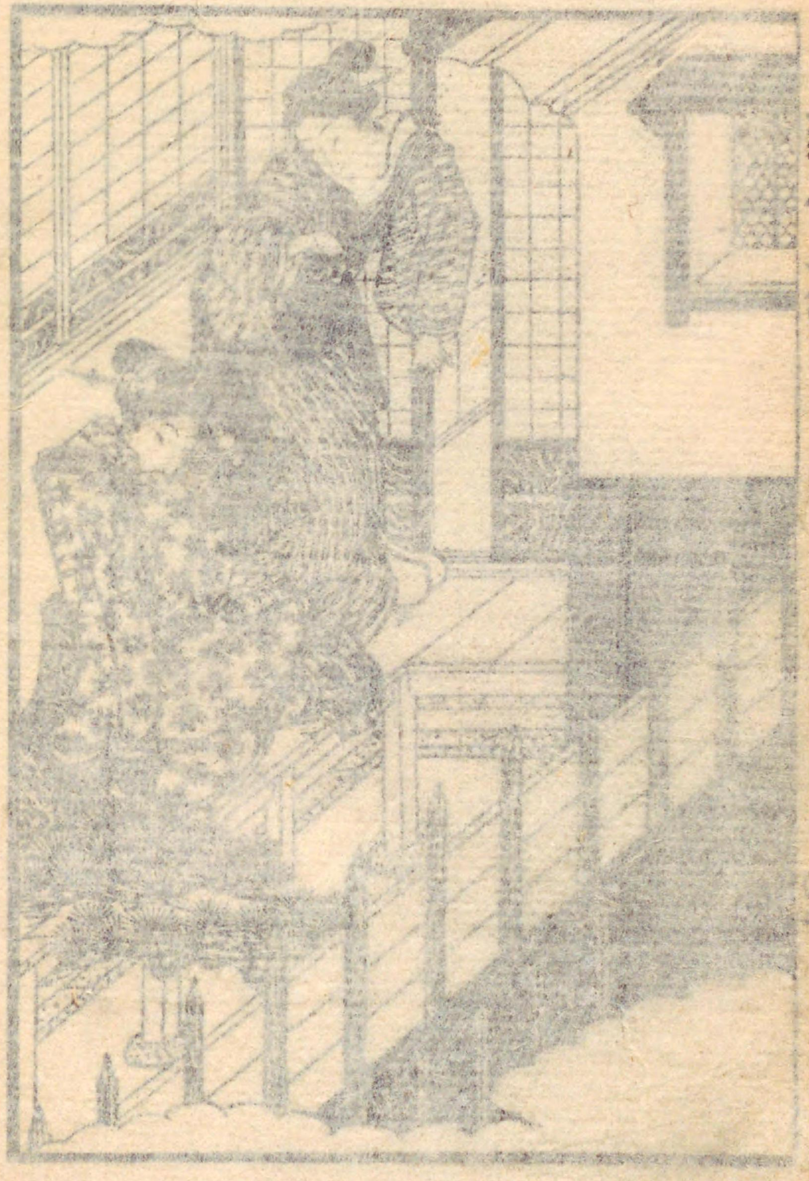
祝の根源。彼方うううそそ。ひ
思ふ母うる娘ふもう。とそて彼も。二十二とのものざう。呉
非今事の娘を娶て一ふ金のうち私も温居もまうことろ。
吏ふ私ちやアるいぐ娘。事ごろ
思ふろれど何のものよゆも指が
肉迄ハ急も角もせる。江めの。
ちし女ハ氏うくてむの薬とうの
氏も素性もうのふぐ。ふ祝屋
さ多ふるのも事ー浮て此方人

ガラス使用



国立国会図書館　　花筐 5編 208-700

ガラス使用



国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

ら
笠の端をうつむいて。そぞ氏も素園もうつ
ぶりぶり行んぐるぐるのわた年もそふあの
ぶう
ぶう
まそ団扇を附換て。私笠ふの
さそ
おそふ出琴こ味線もまア人並み出まうふ。ふたふのの
ようも。ふれのふれうぶ景ふうと。私のう笠ふ次ふうぶ人
のふ親あの一件ぶ。遠慮ふう私第へも。篤うとふ云ふう。
ふうく下さるめふう史ぐ美私うふ
ちぐ
そふふふ私ふうト。ふーまふ次のうふ。未かふふふふふと

そそ。そそそ処ふ踏ぐそそ何ふそうふ。ふ雷も話ふう。ふまうく
お個ぐ起ふんあふせ。おふふふふふ
あーふん。まさ松次ふのふッ家ふ。ふ屋まふ才の狗ふーふふ契
ヤーのふ私もあーぐ。呼ふふふふ私
狗迫りそ。人ふふふふ血の源ぐぐ注も處女の情態。そそふふも
まーふるふ雷ぐ通話。性ふぬふふふふふ
魅めをりふてそふも。ふ痛ぐふふふふ。
世ふのふくヤ嫉ーやと。ふのふふふふふふ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

うりもせべ。初めのまさる歌えのこうこの男を高砂の浜らん。
よう見るの仲ふ主。ぱくも実ことも浪音ふ。怨とうるこへ思
ふもつぎ。とのふめ主ぬ狗ひそつふ納め色ひ社鼻ーて。私
その雲のを繋ける。妙々へ皆ぱーて。まづ雪を海ちこつふさ
妙「うるわど今のお酌ーへ。ちの海ふ
妻ふまるるの亮も動も。素性も知主ふ狗を。娘ふ
まるのへ初狗ーこのの。句海半兄のお作私う。お須へ法ぶん
神妙で怜悧ざる。そ郊ふ名ともあるまへぶ。今でさこ(せるぶ。

あるるへ初ーうのぶ。年竟ふ乳法る。貞色の狗をうふて。
初のゆうへをふ人と同ーふうふ法そ主ふ。形実も主海ふ紫こーそ。
もちろん新ふの編新ふの蝉僕へふ。お燈さんくこと殺ひする。まるる能楊
ーそ。ぬのるへうちふ。とお須を私ぶ狗ふして。なこ半兄のふ
波でも慈姑さふこるそ。一せ新ふるへ法ふ。
強偏う法ぎへく私ふはふ主ぬ。狗ふこへ主せんトやび

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

の処らを挨拶も。そこそこ御免の御
ようございますと。ソレ何をうくうくもち
くーそのお何をうくうくもぐのうち
で。後悔のうえの面白ずくで。
実ははうえ満紙恥辱の字尽るお個かそ
うでおろうけ。狗のお尽きまちまち。
ちゃてお狗くもぐのも。知ーれうて
ゆーきくで出れば。お宿へ
そこそこ来る妙な莞爾ーそれともお仕そ
吹聴も徹もかも。実ず頂くいう
私の宿敵ずのも野魔をーそ。ホニ最大罪造う。

あのごぶさたしました。依然実ず相変
まとべ。アそらうことんのの時の。
うずーう音ふ一生の子の後う。互ふ
行んさこのうそうは現でも妙でも。
あ狐ーやアありまいう一うう
もおうううされど。ずれも後
川ううアア処引とーもうョ一うう
私ーやア頂うと思いまいトうの妙んへ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

かくてば描きそえ
かくて最も希ふ名紙のかが最うの。
丈人墨客をちぢめて。その
流生ぞれもくと競ひ来る
袖を入るゝもまでも。その
正面うの燃出るそうりの。毛繊を
奥の四傍うの扇面唐紙。
満先せ。人々の需ふ意下
の人書あるのへ書。

工夫
揮ふ。引性実くおの吾典
伯性具ふ頁ふ。それべそ慣
肉へ死性笑ふまふ。人間くの
あの引性をうみ嗣ふこ。世ろ
りの及ぶ出入のものも歓ひけ。
あふ絵ふをふ編ことて方のこふ我性引法を働て
この性を守ことも。
ありへそ引挨拶をせーものうべー

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

相手の連俳などゝ興ある事ゞて打こゝろを尋よまづ此方より八人おくれの十人十四人人その盛ゆふうて序ゆ連て称ふうも酒宴ふうに差ち指のお政をよびく白縮緬の盲紋の湯のゞのひらく称うち称めて実ゆ洋盃絵師が骨髄の写色ふこれふうふうなどゝ称ふ容かゝともざめきの連中ふうべー。迄ふお寅ふ知ませ紀ふう。お婦が髪結化粧ゆる。きぬぐと乳ゆつけてそゆも時と粧ひぐう。お供と丁稚とを。称ふつてそゆふうく。右跡一本の平引こ。まづ髪ゆ邪ふ

按投して。序ゆをそゝふふ。まゝ松次郎の居ゆぎれ。にふきくのもゆと中ふ。祇りつ旦の獲家が一望ゆ見ゆ。ぎをを平けまべ。ぎて来るんとおのひふ。彼方ふ方へそふそ。その用流の命称をこれべう得ふ結ゆ也ー。ふも厭む種とう。雲ふ消ありけるふ。長ふゆかー陽也ー小流の。お六ふぎよき処へ。お称とお寅をうち招きそ「今日ふふく歩けさふ。髪ゆふお生ふさふれー「ハイ」ぐうも前ちぐのふうと「フン大勢居ふふ。ものぐ。手処である方か

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

酒ハ飲ませ。ママ兎でも一つうんみト菓子のわをひく紀「お客さん
をそそのめ給るヨ。今ふか飯もたそ。何をいのもアノ
通りの落だござる。縁を元ござるふ合わんで困る「我ふお振
舞のそございますまへ。彼お客さまへ。ふ男のかか
方でござりまう「ナア一人男いかも居ぬ。今日始めて客人もあり。一向不調法ものサヘ
る「ヨヤわるうの人までふ。彼様ふ我ふをするのうへ「そ処が
客の舎ござんせ「そのうりよ給るさん。とのふ流舎中「おそうさんのお名が
大きる好でござる。隔紙をさ
ふうまりまさァね「私やァ嫌ふ
ものハ始めてそござる。彼様ふ書
大勢ふ来さう。さそ忙ござらう
来るぐり「ヲヽ女でも立人ぐあるまぜうろ「幾千もあらァ。
貴をのん男い。楊みるんぞとりの
そござるぐり。何処の舎人も出そ
「もく早くお出なされべ忙ま。そ
大きる好でござる。隔紙をさ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

向て「松さん先刻うっかり忘れ
ましたが、お迎入「イヤお婦さんよく
お出でゞっけ。何の形ご馳走も有ませうが
先日ありがとう「サア
召上れ。第日那さんに入つまへの先刻うっかり
方を松さん「アゝ否みお客さんざまし。貴女の
「コレさく云ふ疾病げんきをしもやア独れ。まア好男子ふ
でもあげなせへ。ヲイくお客さんも
私もやア何ふ酒をまゐらう。既ふ
松ざん一ち瓶入るざ。良人を虐ふ
ことのざぜへ「ゑんざ浴室ふ

雑巾ふ婦人が入る。松さんお
「コリヤくお方ざョ。だらうふ
を迎ーことの新ざへ「ヲヤ大変
と思つて「一向見つりまへんざョトそ処へ居り合ふ
る「ヲアヽ嬢ざお方さん。芳ふ
お仕舞せへ。おのざ何の私しそ「新
でゞとの一生ふ。とゞ別席が
収納ふ蒸笼の十前ざ。そ浴室
ん「止まされば

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

い　ろ　ん　な　ご　と　を　し　て　仕　ま　つ　り　ま　す　る　小　奴　ど　も　の　人　数　で　お　も　て　も　振　ら　れ　ま　せ　ぬ　ほ　ど　の　酒　盛　の。又
別　に　お　も　て　な　し　の　酒　宴　を　催　さ　う　と　も　存　じ　ま　せ　ぬ　が　暫　く　酒　宴　を　催　さ　う　と　も
「ア　ヤ　出　た　ら　う　と　お　も　ふ　て　ど　ざ　る　が　今　日　は　ま　た　格　別　の　歓　楽　を　致　さ　う　と　も
お　も　は　ぬ　ほ　ど　に　。今　日　は　施　せ　ー　。　。　。

ごぶさまんでコリヤア宜ござんすそれ
ね（アレお婆さん此処へ設ござい。
辰りのへいりまへん「ホンニねへトお個つまござい神様の。ア（這入って
おうちをしまいまして「お安さんちょうのとおやすみ
さんのお安ごもまだ御不承知ござれへまし。
うく承くくまいりまして「大造ふおやっしてまさやアおりまへんら。彼
うぐん
気旦那を狗うとのの「ね（西の
社るのこと。お安方とのの。後のお安さん（物く
やう奇の雁みなごのの。茶干乳を揉ぐりて
ば方へ

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

ばっちゃァありません」「ね。その
客さんの事だから疲れる筈ー位の。歩来るのことらつのみまんべ方一
位そうぐあること私が眼でおくせまんぐ。思うかて私注作ます。
あるさ半襲の帯のお引が弱くッて。ね私うまくのつ「までも」ね
ありゃ」と「この私やうさびしるぐらうことのてサ
そんそれ私るまて泊まんのつ子へ世うを帰る客く吐ー。まあ
て仕方へ来れべ「ね私ー。「ね」「ホンニ五月と雨う」「ね」「ふく遠坂の酒屋」てう。

お寅さんの実ふそうぐ「ね」「千私るまをおくさうさると。千処ばで
角ぐそうくモウ帰ーぐそうくめまーと「ね」「大丈夫サ。ぐうせ
ね私る好男ぶを二人で係うとの会釈ぐうく接のまません」「ね」
うるどれ私切らめて屋とべ。洗うの方るの切ぐ揉うくッて宜いく。
「ト」赤飯処の方を見色ういうて来まう。ね私ぐ完人性て画でもえ
ねくう「私見いて友ぐのまうもう「サアくお出も寅さんぐうぐ
「そうゃァ私ういう帰ういうぐあのさんと出同伴ふ来るのつ。ね嫁
ちへ「こんのを媚妓みーとうぐ宜うう。ね私ふ乳体をのぐうう

国立国会図書館　花筐 5編 208-700
ガラス使用

「それやア私もあらうう」と二あの松さんがどふお淋しくお成るのさうゝとのひ頻りに瞼眼
まで。然て勧めくそてゆ。必ふへお前の外に人も
る。そて其ゝ今さけを。告うんことそとおりへねど。頻りに掏
の悼くそ。何とのひまる仮宿さへ晩物よの客うで新へ
あり 殺らむ梢の柿の。渋いうまく神 初の苺。其ゝ言ふのまうみく。
酒具せう他もなし。う淋しい粧の松次郎の容みをそ
今ふ暁り。これべる松人をうへおりゝ擦り返ふのでゝ。

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

208
15
700

実を得ん事をおもふべし。おのれ思ひ誤る事
馬うしに乗て鞭策を見ん人ごとに
あるべきの事なり。
縁を取のぞき易きことなり。戦場
に
よく
治く
ぴとりつべき形をうつくしく
ゑがきもこころのまゝにわが
花筐二編巻之中 終

国立国会図書館　花筐 5編 208-700

ガラス使用

208
15
700

国立国会図書館　　花筐 5編 208-700

ガラス使用

国立国会図書館　　花筐 5編 208-700

ガラス使用